

”挑戦”の先に 見えるもの



「“挑戦”の先に見えるもの」は、瀬戸内国際芸術祭に関わる人たちの姿に光をあて、その挑戦の歩みをたどる連載企画です。

なぜ、私たちはこの企画に挑むのか

日本総陰はこれまで、法人向けのリスクマネジメント事業に取り組んできました。その本質は、「挑戦する心を止めずに、安心して一歩を踏み出せる環境をつくる」ことだと考えています。

私たちが向き合っているのは、リスクそのものではなく、その先にある“挑戦”です。誰かが前に進もうとする姿に、私たち自身も力をもらってきました。

挑戦を応援する会社として、その現場で生まれる物語を社会に届けていきたい——そんな思いから、この企画を始めました。

瀬戸内国際芸術祭の会場でも、アートに関わる人、島で暮らす人、遠くから訪れる人など、それぞれが自分の想いを胸に、“挑戦”しています。私たちは、作品そのものではなく、その背景で動いている“人”の挑戦に目を向け、現場で出会った“挑戦する人”たちの日常や気持ちを、記録し伝えていきます。

第1回では、男木島でボランティアとして活動する青年・ウーさんの姿を追いました。

そして今回、舞台は瀬戸内国際芸術祭（以下、芸術祭）の裏側へ。シリーズ第2回は、芸術祭を支える瀬戸内国際芸術祭実行委員会（以下、実行委員会）にフォーカスし、その事務局で約20年にわたり現場と向き合ってきた今瀧（いまたき）さんの言葉を通して、“実行委員会の挑戦”を掘り下げます。

■新エリアへと広がる芸術祭——「届けたい」という思い

2025年、芸術祭はさらに広がりを見せています。今回から新たな開催エリアが加わり、訪れる人が出会うアートの舞台は、より多彩で立体的に。

「これまで香川県の東部地域は、開催エリアがなかったのですが、今回、実行委員会としては、芸術祭の効果を瀬戸内海沿岸の県下全体に広げていくために、これまで含まれていなかった東部地域のさぬき市や東かがわ市、中部地域の宇多津町も新たに参加自治体として芸術祭に加わっていただくことになりました。これで瀬戸内海に面している自治体はすべて、芸術祭の開催エリアに入っていた形になります。どのエリアもそれぞれに個性があります。訪ねる場所が増えることで、瀬戸内の魅力をより多面的に伝えられるようになると思うんです。」

そう話してくれた今瀧さん。

引田（ひけた）や志度（しど）、津田（つた）、宇多津（うたづ）といった新たなエリアは、それぞれに異なる風土と文化を持ち、芸術祭に新たな表情を加えてくれています。地域の魅力を丁寧に掘り起こし、多様な形でつなげていくとする芸術祭の活動をより豊かなものになっています。

■「その土地にふさわしい表現」を探して

エリアごとの特色を、どう活かすか——それは作家や作品の選考にも表れます。

芸術祭の作家や作品のディレクションには、北川総合ディレクターの方針が強く反映されています。一つひとつの作品が、地域の魅力を引き出し来訪者に伝えることが出来るか、作家が、いかに地域を理解し、作品を通して地域のことを訪れる人々に体験してもらえるか、この芸術祭が大切にしてきた、“アートの力を借りて地域を再生していく”という思いが、この芸術祭を形づくっているのだと実感します。

作家の選定は、招待と公募があり、公募は芸術祭開催の翌年には募集を開始しています。実績のある招待作家とこれからの可能性を秘めた公募作家が芸術祭の多様な参加作家を構成しています。

■地域とともに創る——つなぎ、築く力

芸術祭は、ただ作品を飾るイベントではありません。エリアごとに地域の調査を行い、地域の将来計画やまちづくりのビジョンとすり合わせながら、一緒に「場」を築いていく。そんな実直な姿勢が、今回の芸術祭にも随所に見られます。

飲食提供の分野でも、地域産品を活かしたおもてなしを自治体や地元の方々と協力して展開しており、アートだけでなく「暮らし」とのつながりも感じられる仕掛けになっています。

そして、こうした構想の実現を支えているのが、実行委員会です。

「ディレクターが決めた作家や作品を、現場で制作していく際には、実行委員会が地元自治体や住民の方と調整しながら進めていくことになり、その為には地域との密な関係が欠かせません。」

実行委員会には、各開催自治体から1人以上の出向者が常駐しており、その方々がエリア担当者として地元の声をすくい上げ、アーティストやディレクターと連携して芸術祭の現場を支えています。

実行委員会は単なる“運営母体”ではなく、まさに地域と芸術をつなぎ、ともに築く力として欠かせない存在ですね。



今瀧哲之（いまたき てつゆき）さん。20年来の経験を活かし、事務局にて広報を担当されている。

■“積み重ね”が生んだ進化

約20年に渡り芸術祭に関わってきた中で、実行委員会の運営体制にも変化が見られたと教えてくれました。

「回を重ねてきたので、仕組みがブラッシュアップされてきたと思います。手探りだったところから、徐々に進化してきていると感じます。」

芸術祭は、終了の翌年から次の開催に向けた準備が始まり、約2年の歳月をかけて形づくられていくもの。その積み重ねが、より自由に、より開かれた芸術祭へと繋がってきました。とりわけ今年は、例年以上に熱量を感じると今瀧さんは言います。

「前回はコロナの影響もあり、関係者の皆さんが思うように動けなかったところがありました。でも今回は、そういった制約がないので、皆さん全力を出し切られているなと感じています。」

作家、ボランティア、地域の皆さん——携わるその誰もが制約なく活動できる今回の芸術祭に、大きな期待が膨らみます。そんな今回の見どころを、今瀧さんに教えていただきました。

「たとえば、全シーズンを通じて楽しめる小豆島（しょうどしま）は、人気の新作も多く、芸術祭以外の観光やグルメも充実。アートに詳しくない方でも、気軽に楽しめると思いますよ。」

1シーズンだけ参加するエリアも注目です。夏会期は、引田エリア、志度・津田エリアが今回初開催となります。古い港町やお遍路さんの門前町のエリアで、島とは違った風情を楽しめますし、21時までオープンしています。また、夏会期の高松港エリアでは、ベトナムの工芸、雑貨、食事が楽しめる「ベトナムマルシェ」が、20時までオープンしています。どちらも、島から帰った後やお仕事帰りの暑さも和らいだ時間に鑑賞できますのでお薦めです。

秋会期は、宇多津エリアと本島、高見島、栗島、伊吹島の西の島4島でも開催されます。気候の良いシーズンですし、まだ、行かれたことがない方も多いと思いますので、お見逃しのないようお薦めです。」

その時、その季節、そのエリアでしか出会えないアートの風景。「今」を全身で味わう特別な体験を、ぜひ現地で楽しんでみてください。



ベトナムプロジェクトが開催される高松港周辺の様子。夕日とのコントラストも相まって幻想的な風景が見られることが予想される。

■汗で社会を変えるということ

芸術祭を支えているのは、アーティストや地域の方々、そして、それをつないで来た人たちの存在です。その一人として、20年にわたり携わってきた今瀧さん。長年の関わりの中で得た学びと、挑戦する人たちへのエールを伺いました。

「芸術祭のような大きなプロジェクトを任せてもらえる機会は、そう多くはありません。僕にとっては、本当に良い経験をさせてもらったと思っています。何より大きかったのは、“自分の汗で社会を変えることができる”経験を得たこと。そしてそういった可能性は、実は色んなところに眠っている。

これから社会に出ていく若い方たちも、きつとどこかでそんなチャンスに巡り合うはず。その時には後悔しないように全力で取り組んでほしいなと思います。」

また、振り返って特に印象深いのは、一緒に歩んできた人たちの存在だとも教えてくれました。

「苦楽をともにした仲間や地域の方々とのご縁は、一生の財産です。黎明期に力を合わせた人たちは永遠の仲間であり、今でも連絡を取り合う“同志”のような存在。第1回の2010年を支えたメンバーは、今でも実行委員会や関係部局で活躍してくれています。」

アートの風景の裏には、挑戦の積み重ねと、信頼のつながりがありました。地域に根を張りながら続くその歩みには、まさに“汗で社会を変えた”証が息づいています。

今瀧さんをはじめ、実行委員会の方々の挑戦が、目に見える形で結実している今年の瀬戸内国際芸術祭。夏会期の開催は、まもなく8月1日から。その熱意と想いが込められた“つながりの場”を、ぜひ体験してみてください。

県外の皆さまのご来県も、心よりお待ちしております！